

やまどべに

こもりづの

隠水之

ゆくはたがつま

往者誰妻

ゆくはたがつま

往者誰妻

したよはへつゝ

從下延作

(右大意) 大后に忍び隠くれつゝ(したよはへつゝ)幸行し給へる君は今や歸へり上ぼり給

はんとす扱ても歸へるは誰が夫ぞと、哀れに情け深かく心を述べたる也、

其の後大后には豊明し給はんとて御綱拍を取らんとて木の國に幸し給へる間に、天皇は

八田若郎女に通じ給へり、倉人女此の由を大后に報ず、大后大に怒かりて採り來れる御綱

拍を悉く海中に投げ宮に歸へらずして山代に幸せり、其の時の歌

つぎふねや

冠辭

かはのぼり

川上

かはのべに

川之邊

さしぶき

鳥草樹

しがしたに

其之下

やましろがはを

山代川

わがのぼれば

吾上者

あひだてる

生立有

さしぶのさ

生立有

あひだてる

生立有

はびろ

葉

しがはなの

其之花

しかはの

其之葉

おほきみろか

大君歎

ゆつまつばき

五百箇眞椿

てりいまし

照坐

ひろりいます

廣坐者

(右大意) 山代川を川上ぼりて爰に來つれば、水邊に生ひたてる鳥草樹、椿などあり、之

を見るにつけても天皇の事を想ひ出だすなり、御面影の椿の花の如く照り輝き、葉の如く

廣がります形状は目の前に浮び出づる事よと戀ひまつれる也

斯くて大后山代より奈良に出で給ひ山口に到れる時歌ふて曰く

つぎねふや(冠辭)

みやのぼり

宮上

あそによし(冠辭)

をだて(冠辭)

わがみがほし

吾見欲

やましろがはを

山代川

わがのぼれば

吾上者

ならをすぎ

奈良良過

やまをすぎ

後過

くに

國に者

は

葛城 わきへのあたり  
吾家之邊

高 たか  
かみ み  
官 や

(右大意) わきへのあたりといふ所以は、此の後の父君は葛城之曾都比古と申しければ、葛城高宮は蓋し後の故郷に當れり、故にいふ也

斯く歌ひ給ふて遂に又還へりて奴里能美が家に入りたり、天皇太后が倭國に上幸せりと聞き舍人鳥山を遣はしける時送くりたる歌

山代 やまし  
しろに

及 いしけ  
鳥山 とりやま  
吾 あが  
愛 は  
妻 しづまに

將及 いしき  
遇歎 あはむ  
か

(右大意) 山代に早く行きて追いつけ早く鳥山上、吾が愛する妻に早く逢ひこよとの意又續きて丸瀬臣口子を遣はして歌を贈らしむ、

御 み  
室 も  
ろ の  
おほ る  
こ が  
は ら  
大猪子之腹

其 その  
高城 たかき  
在 なる  
おほ る  
こ が

腹 は  
ら に  
あ る  
こ の  
ろ を  
だ に  
か

肝 き  
向 も  
む か  
ふ ふ  
あ ひ  
お も  
は ず  
あ らん

(右大意) 吾が太后を思へる心をだに、思はざるにや、大猪子の吾が腹を何とて知らざるぞと怨じ給へるなり  
又歌曰

つ や  
ぎ まし  
ね ろ  
ふ

山代 やまし  
女 しろめ  
うち し  
お ほ  
ね ね

木 こ  
環 く  
持 は  
も ち  
ね じ  
ろ の  
白 しろ  
根 ね  
ま か  
ず け  
ば こ  
そ

白 しろ  
腕 た  
む き  
し ら  
ず と  
も い  
は め  
不 し  
知 ら  
將 言  
有

(右大意) 今までに汝の白きなよやかなる腕を枕として夫婦の語らひせさればこそつれなくも知らずとは云ふらめ、既に夫婦の語らひせし中なるに何とて吾が心を知らざるぞとこれも怨じける也口子臣天皇の命によりて此の御歌を太后に奉つるの時雨大に降りたり、彼即ち其の雨をも避けず前殿に伏せば後殿に出で後殿に拜せば前殿に隠くる、斯くして遂に

庭中に駆け廻りて着たる衣物皆紅色となりぬ、時に口子臣の妹口比賣大后に仕へ奉れり  
口比賣即ち歌ふて曰

やましろの

物のまをす  
なみだぐましも

つきのみやに  
筒木宮  
あがせのきみは  
吾兄君者

(右大意)

吾が兄の雨に濡れて庭中にあるを見れば哀れに思ふて涙ぐみ來ると也、

大后其の故を問ふ即ち吾が兄口子臣なりと答へき、

三種に變する寄虫

是に於いて口子臣其の妹口比賣及び奴理能美と議し天皇に奏して曰く奴理能美が飼ひける

虫に一度は旬虫となり一度は殼となり一度は飛ぶ鳥になりて三種に變ずる奇虫あり、大后

は之を見給はんが爲めに幸し給へるなり更らに異心は候はずと述べければ天皇之を聞こし

召し、然らば朕も見ばやとて奴理能美が家に幸し給ひぬ、

天皇大后の坐ませる殿の戸に立たして歌ふて曰く

つぎねふ

やましろめの

こくはもち  
木 根 持

うちしおほね  
打 大 根

さわ 清に

ながいへせこそ  
汝之言社

うちわたす  
打 渡

やがはえなす  
彌木榮如

きいりまみくれ  
來入參來

(右大意)

汝は騒々しく嫉妬する故にこそ吾はこゝに來れるなれとなり、

天皇又八田若郎女を戀ひ給ひて遣くり給へる歌

や た の

ひともとすげは  
一本管

こもたず  
子 不 持

たちかあれなむ  
立歟將死

あたらずがはら  
可惜菅原

ことをこそ  
言

すげはらといはめ

あたらずがしめ  
可惜清女

(右大意)

汝は一本管の子を持たざれば可惜菅原と口にこそいへ、實は清がしき我が最愛

のものよとなり

八田若郎女の答歌

や 八 九 田 の  
ひとりをりとも  
ひとり居 雖  
よしときこそば  
好 聞

ひともとすげは  
一本 菅  
おほきみし  
天 皇  
ひとりなりとも  
獨 居 雖

天皇又其の弟速總別王を媒として、庶妹女鳥王を乞ひけり、然るに女鳥王速總別王に語りて曰く、大后の嫉妬深かき尙ほ若郎女をも治むる能はず、然るに妾何ぞ仕へまつらん耶、妾は御身の妻となりなんと云ひて即ち速總別王と婚したり是を以て彼れ復た奏せざりき、天皇身づから女鳥王の所に幸し其殿戸の闕の上に至れり、時に女鳥王機に坐して服を織れり天皇即ち歌ふて曰く

め どり の  
女 鳥  
あろすはた  
織 服  
たかゆくや  
高 行  
みおすひがね  
御 料

わがおほきみの  
吾 王  
たがかねろかも  
誰 料 敷  
はやぶさわけの  
速 總 別

女鳥王答歌

天皇即ち其意を了して宮へ還へれり、此の時速總別王來れるに女鳥王の歌

ひ ば り は  
雲 雀  
たかゆくや  
さしぎとらさね  
鳥 取

あめにかける  
天 翅  
はやぶさわけ  
はやぶさ

(右大意)

此の歌の意は大雀命(垂仁帝)を弑し給へと勸むるなり、蓋し天皇が女鳥王の速總別と婚せるを恨らまんことを恐れてなるべし、鶺鴒(さしぎ)とは即ち大雀命をさしてい

へるなり、  
天皇此の歌を聞き軍を興として彼れ等を攻めんとす、速總別女鳥の夫妻は逃がれて倉椅山クラハシヤマに上ぼれり、速總別歌ふて曰く

は したての  
梯 立 之  
さがしみと  
巖  
わがてとらすも  
吾 手 取

くらはしやまを  
倉 椅 山  
いはかきかねて  
岩 搦 不 得

(右大意) 梯立てたらんが如き倉椅山の險阻を上ぼらんとするに女のかよはくは上ぼり能

天皇軍を  
速總別して  
大雀命を  
殺さる

はねば吾が手を取りて登ぼると實景を歌ひしもの也、  
又歌曰

はしだての

さがけしど

さかしくもあらず

三人追軍の爲めに遂に殺るされぬ、

或る時天皇豊樂し給はんとて日女島に幸行せさせ給ひけるに、其の島に雁あり卵を生みた

り、天皇武内宿禰を召して其の卵を生める状を問はせ給ふに歌を以てす

たまきはる(冠辭)

なこそそは

そらみつ

かりこむと

宿禰の答歌

くらはしやまは

いもとのぼれは

妹登者

うちのあそ

よのながひと

やまどのくにに

きく

聞乎

たかひかる

うべしこそ

まこそそに

あれこそは

そらみつ

かりこんど

ひのみこ

どひたまへ

とびたまへ

よのながひと

やまどのくに

いまだきかず

(右大意) 成るほど仰せの如く臣は此の世に長く生きたるものに候へど、雁の子を産むこ

と如何にも存じ寄らず候なり、

斯くて御琴を賜はりて歌ふて曰く

ながみこや

かりはこむらし

つひにしらむと

終將知

(右大意) 蓋し想ふに王が天下を知ろしめさん前兆に雁は子を産むならんとなり、

免寸河の西方一の高木あり、其の樹の影朝日に當れば淡道島に及び夕日に當れば高安山を

越えたり、此の樹を切りて船となすに其の疾きこと矢の如く、名を枯野と呼びたり此の船を以て且暮に淡道島の寒泉を酌み天皇に奉つるの料とせり其の後此の船破ふれば鹽を焼き其の焼け残れる木を以て琴を作くりしに、其の響七里に聞こえけり  
歌に曰く

からぬを  
枯野  
しがあま  
其餘  
かきひくや  
振弾  
どなかの  
門中  
ふれたつ  
振立  
さや  
しほにやき  
鹽焼  
ことにつくり  
琴造  
ゆらのどの  
由良門  
いくり石  
海に  
なづのきの  
浸漬木

(右大意) 枯野と呼べる船と鹽に焼き残りを以て琴を作くり之を弾くにさやく、と音して其の響誠によるしとの意

若 櫻 宮

伊邪本和氣命 履仲天皇

天皇元の難波宮に坐しませし時大嘗に坐して豊明をなさせ給ふの時酔ふて臥し給ひけるを弟王墨江中王天皇を取りまつらんとして大殿を焼きたり「時に阿知直勢かに天皇を盗み出て倭に幸さめたるに、天皇は尙ほ寝ぬ給ひき、多遲比野に至り漸く目を覺まし給ひ驚いて此處は何處ぞと問ふ、阿知直審ぶさに實を以て答ふ天皇即ち歌ひ給はく

たちひぬに  
丹比野  
たつごも  
防壁  
ねむとしりせば  
ねむとしりせば  
將殿知  
もちこてましもの  
持來

(右大意) 此の多遲比野に來りて寝んといふことを兼ねて知り居りたらんには、ツツゴモ(席やうのものを壁に着けて風を防せぐもの今の屏風の如きものか)を持って來りたらんものを残念なりと也

波通賦坂に到り給へる時遙かに難波の宮を願望し給へば、猛火高く起こりたり天皇即ち歌ふて曰く

一女道に  
賊状を語

はにふさか  
地生坂  
かぎろひの

わがたちみれば  
吾立見  
もゆるいむら  
燃家群

つまがいへのあたり  
妻之家邊

(右大意)

殖生坂は河内の丹南郡にある坂なり扱て歌の意は今われ此の殖生坂に來りて望見すれば我が妻の住めるあたりは一面に火の手盛んに燃えおる事よと嘆じ給へる也

大坂山口に到り給へるとき一人の女に遇へり其の女の曰く兵器を持せる多くの人達は茲の山を塞さぎ居れり、當岐麻道より廻ぐりて幸行し給ふべしと天皇即ち歌ふて曰く

おほさか  
大坂

あふやをとめを  
遇處女

みちとへば  
道問

たにはのらず  
直不告

たぎまぢをのる  
當麻道告

(右大意)

大坂に來りて逢ひたる處女に道を問へば、直行の道を行けと云はずして當岐麻道を行けど教へたり、扱ても感すべき處女なりと賞し給へるなり、

こゝに皇弟水齒別命參り給ふ天皇其の墨江中王と協心せるやを疑ふ、由つて面せず、水

曾婆加理  
其の君を  
弑し奉つ

齒別命即ち墨江中王を殺し來らんとを約して去る、水齒別は直ちに難波に還へり墨江中王の近臣曾婆加理を欺むき曰く汝若し吾が言ふことを聞かば、吾れ天皇となり汝を大臣と爲さん如何にやと、曾婆加理喜こんで之を諾せり即ち墨江王を殺せと命じ是に於いて曾婆加理は竊か墨江王の圃に入るを伺ひ矛を以て之を殺せり、水齒別曾婆加理を伴ふて大坂山口に至りけるときの心の中に思ひけるは、曾婆加理吾が爲めには大功あれども、既に君を弑せるの罪あり其の功は元より賞すべし而かも其の罪亦問はざるべからずと、先づ約の如く大臣の位を彼に賜ひ百官をして拜せしめ、大に酒宴を催したり、面の隠くすほどの大杯を以て酒を勸む、水齒別王彼の大杯を乾して之を曾婆加理に與ふ曾婆加理之を受けて飲みけるに大杯殆んど其の面を覆ひたり水齒別王其の間隙を見すかし劔を抜いて之を誅したり、

多治比宮

水齒別命  
——  
反正天皇

遠飛鳥宮

男淺津間若子宿稱命 允恭天皇

右不同母  
妹に逆す

此の天皇の日繼、輕太子未だ位に即き給はざりし以前、同母妹輕大郎女と相好し給へり、其の時の歌に曰く

あしびきの  
やまだかみ  
山 高  
したどひに  
下 聘  
したなきに  
下 泣

やまだをつくり  
山 田 佃  
したびをわしせ  
下 稱 命 走  
わがとふいもを  
吾 聘 妹  
わがなくつまを  
吾 泣 妻

こふこそは

やすくはだふれ  
休 肌 觸

(右大意) 山田を作る樋の水の地中を行くが如くに、吾は今妹と相通ぜり、忍びし心の

今日こそ本望を達して心は安らげく肌ふれしとなり、

こはシラゲ歌なり又歌曰

さし竹葉に  
たしだしに

うつやあられの  
打 露 隠  
あねてむのちは  
率 殿 後

ひとほかゆども  
人 議 雖  
さねしさねてば  
眞 寢 眞 寢 者  
めだればみだれ  
亂 者 亂

うるはしと  
愛 かりごもの  
冠 辭  
さねしさねてば

(右大意) 此の歌二首に區別せば意味明亮なり、即ち初めの一首を「ひとほかゆども」ま

でとし、夫より以下を後の一首として解するなり、扱て初めの意は、竹葉を打つ露のたし  
だしに、相逢ふての後は人々色々に浮名を立て、謀るども、決して厭はじとなり後の一首  
は愛らしき者が妹と思ひ通りに一所に寝たらんにはよしや心は亂れば亂れよとなり、  
こは夷振の上歌なり、是に於いて百官を初め天下の人皆輕太子に叛きて穴穗御子に歸した  
り、輕太子畏れて大前小前宿禰の家に隠くる、穴穗御子兵器を收めて軍を興こし宿禰の家  
を圍みけり、其の門に及ぶ大冰雨降り由つて穴穗歌ふて曰く

あほかへ

をまへすくねか  
小前宿禰

穴穗御軍  
を起こす



かなどかけ

家門陰

あめたちやめむ

雨立止

かくよりこね  
如此儂來

(右大意) 物共早く來れ、此の家を攻め取つて雨宿りせばやといふ意なり

大前小前宿禰手を擧げ膝を打ち舞ひ歌ふて曰く

みやびどの

宮人

あちいきと

落去

さどびともゆめ

里人語

あゆひのこすい  
足結小鈴  
みやびとよむ  
宮人響動

この歌は宮人振なり、

(右大意) 宮人等は足結びの小鈴落ちたるにさへ騒ぎ立つるが如く、一個の太子を打ち奉

つらんと騒ぎ給ふはあろかなり、ゆめつゝしみて騒ぎ給ふなどなり、

宿禰かく歌ひつゝ穴穂の前に至りて曰く請ふ皇兄を攻め給ふな、人必ず笑はん君責め給はずとも臣正さに撃ち奉るべしと、太子を捕らへて之を献ず、太子捕へられける時の歌、

あまただむ

天飛

かるのをとめ  
輕媛女

宿禰輕の太子を捕へて献ず

いたなかば

甚泣

はさのやまの(地名)

ひとしりぬべし  
人知可

はとの

したなきになけ

下泣泣

(右大意) 輕の媛よ、いたく泣かば人や悟らんほどに忍びて泣けよとなり

又歌曰

あまだむ

かるをとめ

したゝにも

下下

よりめてとほれ  
假行去

かるをとめども

輕媛女共

斯くて輕太子は伊余の湯に流されたり、其の時の歌に曰く

あまたぶ

天飛

たつがねの

船之音

わかたはさね

音名問

とりもつがひぞ  
鳥使  
きこえむときは  
將聞時

此の三歌は天田振なり又歌曰く

おほきみ大君を  
 ふな船あま余り  
 わがた吾みゆめ語  
 た登み將といはめ言  
 (右大意) 君今流さるゝも又還へり來ん時はあるぞ、世の人は口にこそ疊を大切にすとは  
 云へ(これは古昔の人は旅行等にて己れが故郷の疊を想ふ事あるをいふ) 其の實は吾が妻  
 を想へるにて疊のみにはあらざらん、親愛なる吾が妻よ、随分堅固に我が還へる折を待つ  
 べしとなり、

衣通王が奉つれる歌に曰く

なつくさ夏草の  
 かきかかきかひに貝  
 おかして明とほれ而行去  
 (右大意) よくく道を要心して行き給へとの意

しまにはぶらば島放

いかへりこむぞ選來

ことをこそ言

わかつまはゆめ吾妻語

あひねのはまの在道

あしふますな足踏勿

其の後堪へがたくて追ひ行き給へる時に歌ふて曰く

きみがゆき君之行  
 やまたづ山断之の(冠辭)

けなかくなりぬ日長經  
 むかへをゆかん迎將行

(右大意) 君が行きてより既に日月も長く經ぬれば戀しさまさりて御迎へに參あらんとて

來つるなり、待つに堪へねばとなり、

其の時太子歌ふて曰く

こもりく隱國の(冠辭)

おほを大に峽は

おほを大に峽は

おほを大に峽は

おもひつ念妻阿恰ま阿恰あはれ

こ伏やると伏やりも

はつせのやまの長谷山

はたはりたて幡張立

はたはりたて

がなさだめ未詳

つくゆみの規弓

あづさゆみ梓弓

たてりたてりも  
立立

おもひづまわはれ  
念妻阿恰

のちもとりみる  
後取見

右大意) 未詳、但し「のちもとりみるおもひづまわはれ」の句あるより考ふるにいたく  
再會を喜びたる意なるや明らかかり、  
又歌曰く

こもりくの  
隠國  
かみつせに  
上瀬  
しもつせに  
下瀬  
いぐひには  
まぐひには  
またまなす  
眞玉如  
かゝみなす  
鏡如  
あ  
在

はつをのかけの  
長谷川  
いぐひをうち  
齊杖打  
まぐひをうち  
眞杖打  
かゝみをかけ  
鏡掛  
またまをかけ  
眞玉掛  
あがもふいも  
吾思妹  
あかもふつま  
吾思妻  
いはこそに  
云者社

(右大意) 鏡の如く玉の如く我が思ふ妻は國にありてこそ家にも歸らめ、今此く逢ひける  
上は國も家も戀しからずとなり  
斯くて共もに死し給へり

穴穂宮

穴穂御子  
——  
安康天皇

朝倉宮

大長若健命  
——  
雄略天皇

天皇阿岐豆野に獵りし給ふに、  
蛸(此)腕を喰ひけるを、蜻蛉來りて其の脚を喰ひける其の  
時歌ひける御歌

みえぬしの  
御言野  
しふすど  
猪伏

をむろがたけに  
地名  
たれぞ  
誰

おほまへに  
 大前  
 やすみし  
 安見  
 ししまつと  
 猪待  
 しろたへの  
 白服  
 たこむらに  
 手服  
 そのあむを  
 其の  
 かくのごと  
 如  
 そらみつ  
 冠  
 わきつしまといふ  
 蜻蛉島云

まをす  
 申  
 わがおほきみの  
 吾大君  
 あぐろにいまし  
 吳床座  
 そできそなふ  
 袖着具  
 あむかきつきて  
 虹搔着  
 あきつはやくひ  
 蜻蛉速作  
 なにおはむと  
 各將員  
 やまどのくにを  
 倭國

(右大意) 御吉野のナムロが嶽に猪ありと大君(天皇自己をいふ)の獵に出で、猪を待ちけるに此來りて我が腕を喰ひたり、然るに蜻蛉來りて又其の此を捕ふ日本は昔より蜻蛉國といへば其の名に負ひて彼の蜻蛉が奇功を立て、朕に仕ふ奉つるなりといふ意なり、又或る時天皇葛城の山に登り給へるに大なる野猪出でたり、天皇鳴鏑を以て之を射給へる

に、其の猪怒りて吼けり來る、天皇即ち榛木の上に登り歌ひ給はく  
 やすみし  
 あそばし  
 やみし  
 病猪  
 わがに逃  
 朕  
 ありを岡  
 荒

わがおほきみの  
 猪  
 うたきこしこみ  
 宇多岐長  
 のぼりし  
 はりのきのえだ  
 榛木枝

(右大意) 傍駐にて明らか也  
 又 皇丸邇之佐都紀臣が娘袁村比賣に婚せんとて春日に出で給へるに、道にて彼の媛女に逢ひしば、媛驚ろきて岡邊に逃げ隠れたり、天皇歌ひ給はく

あどめ  
 媛女  
 かなすきも  
 金  
 すきばぬるもの  
 組環物

いかくるをかど  
 隠岡  
 いほちもがも  
 五百箇欲得

(右大意) 媛が隠くれたる此の岡邊を金組を多く得て堀り撥ばかんものとの意又天

長谷にて豊樂せさせ給へるとき、伊勢國三重の采女、大御盃さげて奉つりけるが、折りし  
も槻トノナカキ(クヤキ)の葉落ちて其の盃に浮かべり、采女之を知らずして奉つれり、天皇盃中に浮  
かべる葉を見給ひ、采女を打ち臥せ刀を以て刺さんとし給へるに、後の采女天皇に白して  
曰く暫らく我身を殺し給ふな申すべきことありと奉つれる歌

まきむくの  
あさひひの  
ゆふひひの  
たけのねの  
このねの  
木  
やほによし  
八百土  
まきささく  
冠  
にひなへやに  
新  
も、だる  
百足

ひしろのみゆは  
日代宮  
ひでなみや  
日照宮  
ひかけなみや  
日陰宮  
ねだるみや  
根足宮  
ねばふみや  
根延宮  
いさづきのみや  
杵築宮  
ひのみかど  
櫓御門  
おひたてる  
生立有  
いきがえは  
槻技

天皇嘗つて河内なる皇后日下部王の許に幸し給ひけるに后即ち奏せしめて曰く、日に背む  
きて幸し給へることいと恐しこし己れ上ぼりて仕へまつらんと天皇其の宮に還り上ぼる時

ほつえは  
秀  
なかつえは  
中  
志づえは  
下  
ほづえの  
秀  
なかつえに  
中  
なかつえの  
志もつえに  
下  
志づえの  
ありきぬの  
鮮衣  
さしがせる  
指舉有  
うきしあぶら  
浮脂

あめをおへり  
天覆有  
あづまをおへり  
吾妻覆  
ひなをおへり  
鄙  
えのくらばは  
枝末  
あちふらばへ  
落  
えのうらばへ  
あちふらばへ  
落  
えのうらばへ  
みへのこが  
三重子  
みづまきうきに  
瑞玉盃  
あちなづさひ  
落浮

坂の上に立ち給ふて歌ふて曰く

くさかべの

たしみども

冠 此方此方の

たかさかゆる

立 榮

もとに者

本 者

すゑべに

未 方 者

いくみだけ

たしみだけ

のちもくみつむ

後 將 殿

あはれ

拾 拾

あはれ

拾 拾

(右大意) 遙るく尋ね来て本意なく歸へる意を含くめたる歌あり

又或る時天皇美和河に出で遊び給ひけるに河邊に衣を洗ふ童女ありけり、容姿いと美はし

こちのやまと

此方山奥

へぐりのやまの

平 群 山

やまのかひに

子 映

はびろくまがし

葉廣熊白橋

いくみだけおひ

入組竹生

たしだりおひ

立紫竹生

いくみはねず

入籠不殿

たしにはおぬず

體不率宿

そのおもいづま

其 思 妻

かりければ天皇誰が女ぞと問はせ給ふに名を引田部の赤猪子と申すと答へき、天皇曰く汝他に嫁せずして待て朕汝を召すべしとて宮に還へり給へり、斯くて赤猪子天皇の命を謹しみ領し、嫁せずして待つことこゝに八十餘年に及びける、然れども何等の報なかりき、赤猪子心に思ひけるは、命を待つこと既に八十年姿容疲萎して再び見ゆべからず、然れども其の情を白うさずして已まんは残念なりと、此の由を天皇に奏しけり、天皇既に前言を忘れ給ひ赤猪子に問ふて曰く、汝はこれ誰が家の老女ぞ、答へて曰く某月某日天皇の命により待つことこゝに八十歳今は容姿枯摘して遂に侍のむべきなし、只妾が志のほどを告げまつらんが爲め参りけるやと、天皇大に驚き給ひて曰く、然り吾れ實に前言を忘れたり、而かも汝能く操を守りて徒らに盛年を過ごせること感ずべしとて之に幸せんと欲し給へどもいたく老いぬるを憚り給ひ遂に之に歌を給ひき其の歌、

みもろの

御 室

かしがもと

白橋之本

かしはらをどめ

橋原媛女

いつかしがもと

嚴白橋之本

ゆしきかも

忌々哉

(右大意) 御室の白搦の木の如く、犯かすべからざる此の乙女よといふなり、此の意は天皇彼に婚せんと欲し給へども年齒既に老いたれば、如何ともする能はず恰も白搦のゆゑしきが如しと譬へたるや

又歌曰

ひけ たの  
引 田  
わか くへに

わか くるすはら  
若 栗 栖 原  
みね てまじも  
率 残 物

あいにけるかも  
老 哉

赤猪子の返歌

(右大意) わかくへには若き間なり、即ち歌の意は、若かりし間に夫婦の語らひせましものを今は老いて残念なりとの意、初の二句はわかくへの序言なり、赤猪子涙を拂ふて歌ふて曰く

みも ろに  
御 室  
つ きわきし  
築 餘  
かみのみやびと  
神 宮 人

つ やたまがき  
築 玉 垣  
たにかもよらむ  
誰 將 依

(右大意) 御室に築き上げたる玉垣の作くり餘まれる無用のものを何れにて依らんといふ意は、今は我が身も御室に作くり餘まれる玉垣の如く老いて無用のものとなりたるを誰れにか據らんと譬へを以て意中を述べたる也

又歌曰

くさかえの  
日 下 江  
はなばちす  
花 遊

いりえのほちす  
入 江 遊  
みのさかりびと  
身 盛 人

(右大意) ともしきろかもは美しき哉といはんが如し、歌の意は吾れ今老いたればこそ天皇に仕へまつる能はざる也之につけても花の盛りの人こそ實に羨やましき限りなれと羨望したる歌なり、

又或る時天皇吉野川の邊に幸行の時美童女の容姿美はしきに逢ひ、自づから琴を弾じ童女をして舞はしめ給ひき、其の歌曰

あぐらゐの  
吳 床 坐

かみのみてもち  
神 御 手 以

吉野川の  
美女

ひくことばに  
彈 常世願

まひするをみな  
舞 爲女

(右大意) 自づからの手を下して彈ずる琴に舞ふ乙女の姿よ、斯くていつまでも長くわれ  
かしとなり、

みなことをろ  
水 深  
こし も  
是 も  
たかひかる  
高 光  
ことのかたりごと

こをろに  
深 あやにかしこし  
嗟 長  
ひのみこ  
日 御子  
こをば

(右大意) 纏向の日代の宮(景行天皇の宮)に生ひたる槻の葉の朝日夕日に照りかゝれば  
槻の葉はめでたきものなり天を覆ふ枝上枝中枝下枝の盛んに生ひしげれる葉を、今此の三  
重の子(采女を指して云ふ)が奉つれる盃に浮かしめたり、天地萬物の初めは浮きたる脂の  
如くなりしと云へば、今此の盃の上に浮べる槻の葉は恰も之れになぞらふべきか左れば盃  
に葉の浮きたるは自出たきじるしにして、決して妾を罪すべきにあらず、誤りて浮きたる

木の葉も誠に貴く畏しき瑞祥なりとの意。  
天皇此の歌を聞き大に喜びて采女を容るしき  
又太后の歌ひける歌

やま ま と の  
係 と だ か る  
小 高 有  
に ひ な へ や に  
新 管 屋  
は び ろ  
葉 そ が は の  
その は な の  
其 花  
た か ひ か る  
高 光  
と よ み き  
ことのかたりごと

この た け ち に  
此 高 市  
いち の つ か さ  
市 高 處  
あ ひ だ て る  
生 立 有  
ゆ つ ま つ ば き  
五 百 箇 眞 椿  
ひ ろ り い ま し  
廣 坐  
て り い ま す  
照 坐  
ひ の み し こ  
日 御 子  
た て ま つ ら を  
こ を ば

又同じ時春日の袁持此賣が大御酒奉りける時、天皇の歌



みなそいぐ  
水 溜  
ほだりくらすも  
秀 楯 取  
かたくとらせ  
堅 取  
やがたくとらせ  
綱 堅 取

おみのおとめ  
臣 嬪 女  
ほだりとり  
したかたく  
下 堅  
ほだりとらすと  
秀 楯 取 子

(右大意)

遠拵比賣の大盃に盛るべき御酒樽を持ちたるさまの美るはしきを愛で給ひいよ

く清き心もて事へよとの意なり

袁拵比賣の献つれる歌

やすみし

わがちほきみの

あさけには

いよりだし

ゆふけには

いよりだす

あさきづきが

し た の

わたに

あ せ を

(右大意) 我夫君は朝夕倚りたしせる扇机の下板になりても長かく仕へ申さんとの意なり

栗宮

白髮大倭根子命 清寧天皇

此の天皇皇后ましまさず御子もましまさざりき、天皇崩じて後天下を知らせ給ふの王子な  
ければ履仲天皇の皇女飯豊王暫らく御世を治さめ給ふ  
こゝに山部連小楯播摩の國に宰たりしとき國民新築の小楯が家に至りて宴す酒酣にして火  
焼きの二童をして舞はしむ、二童相譲つりて決せず、頓がて兄舞ひ終りつ弟舞はんとして  
歌ふて曰く

ものゝべの  
物 部  
とりはける  
取 佩  
にかきつけ  
丹 楯 者  
あかはたをたち  
載 赤 楯  
みればいかくる  
見者五十隼

わがせこが  
我 夫 子  
たちのたがみた  
太 刀 手 上  
そのをには  
其 緒 者  
あかはたして  
立 赤 楯  
やまのみをの  
山 三 尾

小橋初め  
て二王な  
知る

たけを

竹

未押摩  
あめのしたあさめたまひし

所治賜天下  
いちべのおしはわけのみこの

市邊之押齒王之

もどかきかり

やつことをしらべたるごと

加調八弦琴  
いさほわけのすめらみことこのこ

伊邪本和氣天皇之子

やつこみすゑ

未

(右大意) 初めの十句は竹を云んが爲めの序言なり、扱て吾れこそは、竹を本かり末か

りし八絃を調べる如く天下を治め給ひし、市邊之押齒別王の子なるごとの意なり小橋之を

聞き大に驚ろき床より轉び落ち二王、左右の膝上へのせ悲泣しけり是に於いて假宮を作り

て此の由を朝廷に報じき、飯豊王之を聞いて大に喜び急ぎ宮に上ぼらしめ給ひき、

扱て志毘臣歌垣に立ちて、其の袁祁命の召さんとする美人の手を取れるとき歌ふて曰く

おほみみの

大

すみかたぶけり

隔

おほたたくみ

大

をどつはたて

彼

踏

手

をぢなみこそ

拙

劣

社

斯く歌ひつ其の歌の末を乞ふ時に、袁祁命歌ふて曰く

すみかたぶけれ

隔

志毘臣亦歌ふて

おほきみの

大

おみのこの

臣

いりたすあり

不入

立有

こころをゆらみ

心

やへのしばかき

八重

柴垣

(右大意) この歌傳の誤りにて袁祁命の歌なる由先輩云へり、扱て歌の意は、汝の柴垣八

重にたゝむとも乙女を得んには何の障りはあるべくもあらねど吾の心は寛裕なれば暫らく

はなだめ措くぞとなり、

袁祁命又歌ふて曰く

しほせの

潮

あそびくる

遊

つまたてりみゆ

妻立有見

なをりをみれば

波

じひかばたでに

鮪

手

志毘臣愈よ怒りて歌ふて曰く

おほきみの

王 やふじまり

八節結

きれむしばかき

將截柴垣

みこのしばがき

王 紫垣

結

しまりもとほし

將焼柴垣

(右大意) 大君の王子の柴垣は如何に入節結びに縛はりて堅く廻ぐらせばとて吾れ之を截らんと欲せば、截るべし焼かんと欲せば焼くべしとなり、斯く歌を以て争ひ其のまゝに別れたり、こゝに袁富所命袁所命に謀りて軍を興こし遂に志毘臣を殺し給へり、

近 飛 鳥

袁所石巢別命 ———— 顯宗天皇

此の天皇父市邊王の骨を求め給ふに淡海國の一賤媼之を知りて王に告ぐ即ち其の骨を得て之を葬むりぬ、特に老媼の功を賞して之を召し上ばせ宮を造くりて之に居らしめ殿戸に鐸鈴をかけて日毎に其の鈴を引き鳴らして之を召したり、御製に曰く

あさちばら

浅茅原

もつたふ

百傳

置きめくらしも

置目來

をだにをすぎて

小谷過

ねてゆらくも

鐸瑠々

(右大意) 鐸路の鈴の聲を聞き多くの野山を過ぎて來るといふは彼の鈴を鳴らして召すを以てしかいふなり、

老媼年既に老いたれば本國に歸らんことを欲して之を請ふ天皇即ち見送り給ひ歌ふて曰く

おきめもや

置目

あすよりは

川日

みえずかもあらん

不見歟有

あふみのおき

海置目

みやまがくりて

御山隠

(右大意) 置目よ汝淡海の置目よ明日よりは山に隠れて汝の姿を見るを得ずと惜別の意を込めたること明らか也

初め天皇の禍に逢ふて逃がれ給ひける時、其の糧食を奪ひ取りし猪飼老人なるものを求めて之を得、飛鳥河の河原に斬りて其の一族を刑せり、天皇又其の父王を弑したる大長谷天

皇を深く怨みて竊かに復讐の念ありき、是を以て其の御陵を破ぶらんと欲す、意富祈命  
(皇兄)の曰く、これ他人を遣すべからず吾れ往いて之を破ぶらんと、即ち御陵の處に至り  
少許の土を堀りて還へり、既に山陵を毀ちぬと復命したり、天皇其の餘まりに迅速なりし  
を以て怪やしみ之を問ふ答へて曰く少許の土を堀りたりと天皇責むるに其の御陵を毀たざ  
るを以てす皇兄即ち答へて曰く父王の怨みを報めんと欲するは是れ誠に理あり、然れども  
大長谷天皇は我れ等が従父にして且つ天下を治めける天皇にあらずや今私怨を以て其山陵  
を毀たば必ず後世の誹りを得んと、天皇又此言を可としき

廣 高 宮

意富祈命——仁賢天皇

列 木 宮

小長谷若雀命——武烈天皇

玉 穗 宮

袁木杼命——繼體天皇

金 箸 宮

廣國押建金日命——安閑天皇

檜 珂 宮

建小廣國押楯命——宣化天皇

師 木 島 宮

太國押波流岐廣庭天皇——欽明天皇

池 邊 宮

橘豐日命——用明天皇

倉 椅 宮

長谷部若雀天皇——崇峻天皇

小 治 田 宮

豐御食炊屋比賣命——推古天皇

明治三十年七月廿三日印刷  
明治三十年七月廿六日發行

定價金貳拾錢

發行者

東京市京橋區日吉町四番地

渡 邊 爲 藏

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

高 田 乙 三

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式會社 秀 英 舍

發行所

東京市京橋區日吉町四番地

民 友 社

版 權 所 有

## ◎民友社出版書籍目録◎

注 意

- (一) 民友社書籍雜誌は全國各賣捌所に毎發免期日を誤らず發送す
- (二) 若し賣捌所に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非らずして其賣捌店に何等かの事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし
- (三) 斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし
- (四) 注文は書名を明瞭に記送さるべし上中下又は第一第二等ある書籍は落ちなく之を記別せらるべし
- (五) 爲替振込み宛所は東京芝口郵便支局

(注意) 物價騰貴後の出版に係る書籍は卸賣直其以前の古版と多少の差違あり書名の頭に◎を付するものは高直の分に屬すと知らるべし但し定價は無論各記載の通り異變なし

明治三十年六月改

東京々橋區  
日吉町四番地

民友社

○ 第一卷 十九世紀の大勢  
 ○ 第二卷 世界經濟上の變動  
 ○ 第三卷 國家と政治  
 ○ 第四卷 教育と遺傳  
 ○ 第五卷 文明之弊及其救済  
 ○ 第六卷 現時之社會主義  
 ○ 第七卷 經濟と道徳  
 ○ 第八卷 歴史と法  
 ○ 第九卷 哲學と變遷史

平民叢書

○ 號 外 名 士 と 家 庭  
 ○ 號 外 紫 式 部  
 ○ 號 外 清 少 納 言

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二  
 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二  
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

三

○ 第一卷 家庭の和樂  
 ○ 第二卷 夏の家庭の遊戯  
 ○ 第三卷 玩具と遊戯  
 ○ 第四卷 家庭教育  
 ○ 第五卷 小兒養育  
 ○ 第六卷 家庭衛生  
 ○ 第七卷 家政整理  
 ○ 第八卷 簡易料理  
 ○ 第九卷 社會交際  
 ○ 第十卷 婦人職業  
 ○ 號 外 家 庭 財 業 斑 理 理 生 育 育 戲 庭 樂

家庭叢書

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二  
 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二 二二  
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

二

第十卷  
 號外 號外  
 白哲人種の前途  
 銀貨之過去現在未來  
 責任内閣

國民叢書

○ 德富猪一郎著 進歩乎退歩乎  
 ○ 德富猪一郎著 人物管見  
 ○ 德富猪一郎著 青年と教育  
 ○ 德富猪一郎著 靜思餘錄  
 ○ 德富猪一郎著 文斷片  
 ○ 德富猪一郎著 天然と人

○ 德富猪一郎著 第一 靜思餘錄  
 ○ 德富猪一郎著 風漫錄  
 ○ 德富猪一郎著 家庭小訓  
 ○ 德富猪一郎著 經濟策  
 世庭小策  
 下上各

世界叢書

○ 第一編 ダウ井  
 ○ 第二編 鐵道王グーランド  
 ○ 第三編 マゼランド

今世人物評傳叢書

郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價  
 二十 二十 二十  
 錢 錢 錢

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 二十 四十 四十 四十 四十 二十  
 錢 錢 錢 錢 錢 錢

郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價  
 二十 二十 四十 二十  
 錢 錢 錢 錢

郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價  
 四十 四十 四十  
 錢 錢 錢



第一冊 フランクリンの少壯時代  
 第三冊 兩ケト  
 第三冊 リンコルン  
 號外 吉田松陰文  
 號外 横井楠文  
 第四冊 子  
 第五冊 同  
 下 上

少年傳記叢書

第六卷 學征 校塵 生餘 涯錄

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 二八 二十 二十 二十 二十 二十 二十  
 二 二 五 二 二 二 二  
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

郵定郵定  
 稅價稅價  
 二十二  
 五二  
 錢錢錢錢

第一卷 武備教育  
 第二卷 遠征藝術  
 號外 本市職技  
 第三卷 職業論  
 第四卷 朝美業  
 第五卷 術論

青年叢書

第一編 山縣有朋  
 附渡邊國武○岡本柳之助  
 第二編 大隈重信  
 附矢野文雄○大石正巳  
 第三編 伊藤博文  
 附伊東巳代治○末松謙澄

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 二十二 二十二 二十二 二十二 二十二 二十二  
 二 二 二 二 二 二  
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價  
 四二 四十 四十  
 十 三 五  
 錢錢 錢錢 錢錢



● 賴山陽 ● 瀧澤馬琴

第十二卷以下目次左の如し

國民小說

○	○	○	○	○	○	○	○
第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八
國民	國民	國民	國民	國民	國民	國民	國民
小	小	小	小	小	小	小	小
說	說	說	說	說	說	說	說

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四十五	四十五	四十五	四十五	四十五	四十五	四十五	四十五
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

雜書目錄

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大	吉	新	誕	今	歸	最	懷	大	吉
日本	田	日本	生	名家	歸	暗	懷	大	吉
膨	松	之	日	文	省	黑	懷	大	吉
脹	陰	青	年	鈔	省	之	懷	大	吉
論	陰	年	日	日	省	東	懷	大	吉
						京	懷	大	吉
						舊	懷	大	吉

(竹像入)

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四十二	四十二	四十二	四十二	四十二	四十二	四十二	四十二	四十二	四十二
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

○ ○ 日清軍記前編  
 ○ ○ 日清軍記後編  
 ○ 德富健次郎著  
 ○ 德富健次郎著  
 ○ 德富健次郎著  
 ○ 武雷土  
 ○ 格武  
 ○ 內村鑑三著  
 ○ 英文 日本及日本人  
 ○ 民友社編纂  
 ○ 征清壯烈談  
 ○ 平田久著  
 ○ 伊太利建國三傑  
 ○ 幕府衰亡論  
 ○ 懷往事談  
 ○ 福地源一著  
 ○ 懷往事談

(背像入)  
 (背像入)  
 (背像入)

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 四廿 二十 六三 四十八 二十 四二 四二 六三 六四  
 五 五 十五 八 十 十 十 十 十  
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

○ 竹越與三郎著  
 ○ 新日本史  
 ○ 新日本史  
 ○ 德富健次郎著  
 ○ 近世史  
 ○ 歐米五著  
 ○ 深井英米著  
 ○ 佛米著  
 ○ 人見一太郎著  
 ○ 國民的大問題  
 ○ 人心の明鏡 世の秘寶  
 ○ 民友社編纂  
 ○ 比律賓群島  
 ○ 平田久著  
 ○ 露西亞帝國  
 ○ 稻垣滿次郎著  
 ○ 外交と外征  
 ○ 渡邊修三郎著  
 ○ 内政外交衝突史

○ 懷往事談

郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定 郵定  
 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價 稅價  
 四廿 二十 六三 四十八 二十 四二 四二 六三 六四  
 五 五 十五 八 十 十 十 十 十  
 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢 錢錢

竹越與三郎著

○支那論

○臺灣論

◎日臺會話大全

◎近松著作一斑

◎巢林子戲曲上下各

◎英國ギツピンス氏原著 日本水上梅彦譯 產業史上卷

◎英國ギツピンス氏原著 日本水上梅彦譯 產業史下卷

◎弘松宣枝著 (題字肖像及手筆入) 龍馬史

◎菊池長風著 柴四朗 德富猪一郎君序 鮮王國

◎雨谷一榮庵著 藤田東湖

(肖像入)

十四

郵定 稅價 二十 錢錢

郵定 稅價 二十 錢錢

郵定 稅價 四三 錢錢

郵定 稅價 八三 錢錢

郵定 稅價 四十八 錢錢

郵定 稅價 四廿五 錢錢

郵定 稅價 二十五 錢錢

郵定 稅價 四十五 錢錢

郵定 稅價 八十五 錢錢

郵定 稅價 四十八 錢錢

内村鑑三著

◎警世雜著

◎中龍兒著 西人行

◎奧中將暹字東條中佐序文 兵營小訓

◎德富猪一郎深井英五合著 歐洲大勢三論

◎堀原保人著 政黨論

◎綠亭主人著 雲龍雄

◎雨谷一榮庵著 大石良雄

◎島田三郎君稻垣滿次郎君序 已成西比利亞鐵道

◎少年傳記叢書號外 少年傳記叢書號外

◎少年傳記叢書號外

(口繪入)

十五

郵定 稅價 四十二 錢錢

郵定 稅價 二十三 錢錢

郵定 稅價 四十五 錢錢

郵定 稅價 四十五 錢錢

郵定 稅價 四十五 錢錢

郵定 稅價 四廿 錢錢

郵定 稅價 二十二 錢錢

郵定 稅價 六三 錢錢

郵定 稅價 二十二 錢錢

郵定 稅價 二十二 錢錢

郵定 稅價 二十二 錢錢

少年史談第一編  
阿部仲麿

少年史談第二編  
阿部新丸

◎金貨本位はやわかり  
阿部新丸

◎古屋主人著  
古反古

◎木戸孝允  
木戸孝允

◎好情法  
好情法

◎兼好法師  
兼好法師

◎德富健次郎著  
ルストイ

◎芳賀八彌著  
ルストイ

◎乾坤一布衣著  
川家光

◎辛田露伴序角田柳作著  
會方

◎井原西鶴

(肖像入)

郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定	郵定
稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價	稅價
四廿	四十五	四廿五	四廿五	四十三	四廿五	四廿	四十二	二十二	二十六
錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢

十六

國民新聞

發行所

東京市京橋區  
日吉町四番地

國民新聞社

國民之友

每土曜  
日發兌

定價一冊  
二十冊  
五十冊  
前金五十五錢  
前金五十五錢  
前金五十五錢  
市外郵稅宛

英文國民之友

發行所

東京市京橋區  
日吉町四番地

民友社

每月一元  
半年六元  
一年十二元  
郵稅一併  
郵稅一併

家庭雜誌

發行所

東京市京橋區  
日吉町四番地

家庭雜誌社

每月二元  
半年十二元  
一年廿四元  
郵稅一併  
郵稅一併

十七

# 民友社書籍雜誌賣捌所

(注意) 此に列挙する賣捌店名は本社直接に取引する店又は特別に記入申込みありし分に限る

(一) 故に全国に於て間接に賣捌する店は此他に多数ありき知らるべし

(二) 間接賣捌所にて店名廣告申込みありは追々掲出すべし

(三) 賣捌所にして取引中事故あり停止又は拒絶したる店名は茲に其事故を掲載することあるべし

東京市神田區裏神保町	上田屋	大坂市備後町	吉岡書店
全 表神保町	東京堂	全	岡島新聞鋪
全 京橋區尾張町	東海堂	京都市三條通富小路	便利堂
全 錦原町	北隆館	全 佛光寺通り	東枝律書房
全 芝區櫻田本郷町	好明館	全 寺町通り	飯口信文堂
全 京橋區出雲町	警醒社書店	全 河原町	大黒屋
全 京橋區尾張町新地	巖々堂	神戸市榮町	船井新聞鋪
全 神田區神保町	敬業社	名古屋市本町	川瀬代助
全 日本橋區新大坂町	鶴屋喜右衛門	全 玉屋町	靜觀堂
全 京橋區弓町	松邑孫吉	福岡市博多	積善館支店
橋渡市太田町四丁目	國民新聞社支局	全	森岡書店

筑前久留米町	菊竹書店	岡山縣岡山市	漸進堂
熊本市新町	長崎次郎	全 白州町	奥村書店
全 南新坪井町	好文堂	青森縣弘前市親方町	近松書店
熊本縣八代郡八代町	時昌堂	全 本町	今泉書店
全 蕪池郡櫻府町	中島常平	北海道札幌市一條西三丁目	進上谷治吉
長崎市酒屋町	安中半三郎	全 室蘭港札幌通り	最上谷治吉
全 引地町	安中集榮堂	全 札幌南二條西三丁目	廣目屋
仙臺市園分町	佐勘書店	北海道小樽港	川南重祐
全 大町	木文商店	釧路中津町	野依曆三
盛岡市中橋通	東北堂	長野縣野澤町	岩下新聞鋪
盛岡市國屋町	積善館支店	全 長野町	西澤喜太郎
越後 水原町	西村六平	全 岩村田町	文盛館
越後 長岡京四の町	目黒十郎	上毛富岡	木田商店
全 高田町	高橋書店	鹿兒島縣鹿兒島市	吉田幸兵衛
全 新潟市西堀通り	室直支店	全	金村幸兵衛
全 村松町	原貞治	茨城縣水海道町	谷村書店
全 新發田町	梅の屋佐吉	富山市東四丁物町	新々堂
全 小千谷	野津仁太郎	甲府市御町	中田書店
	野口俊策		柳正堂

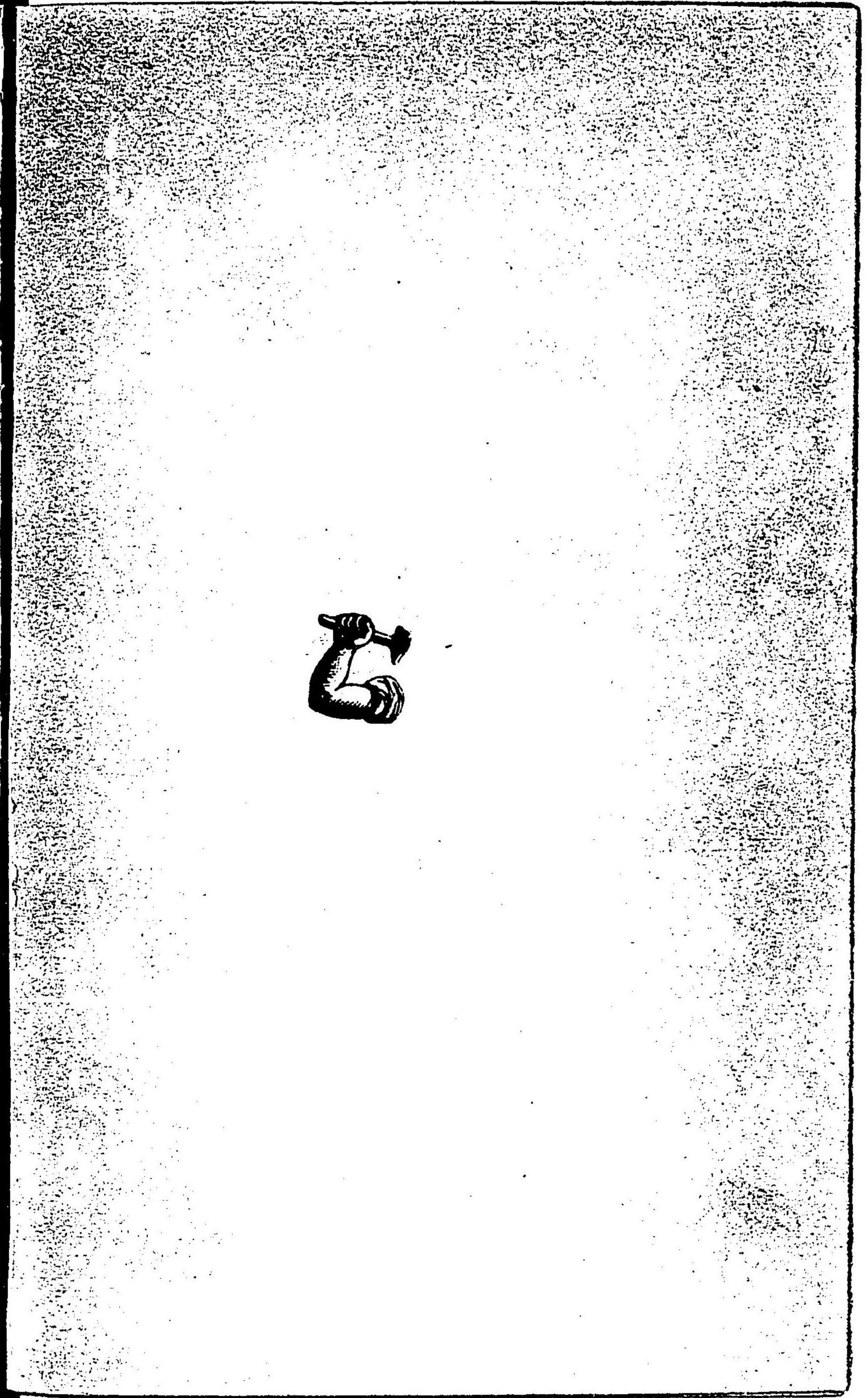
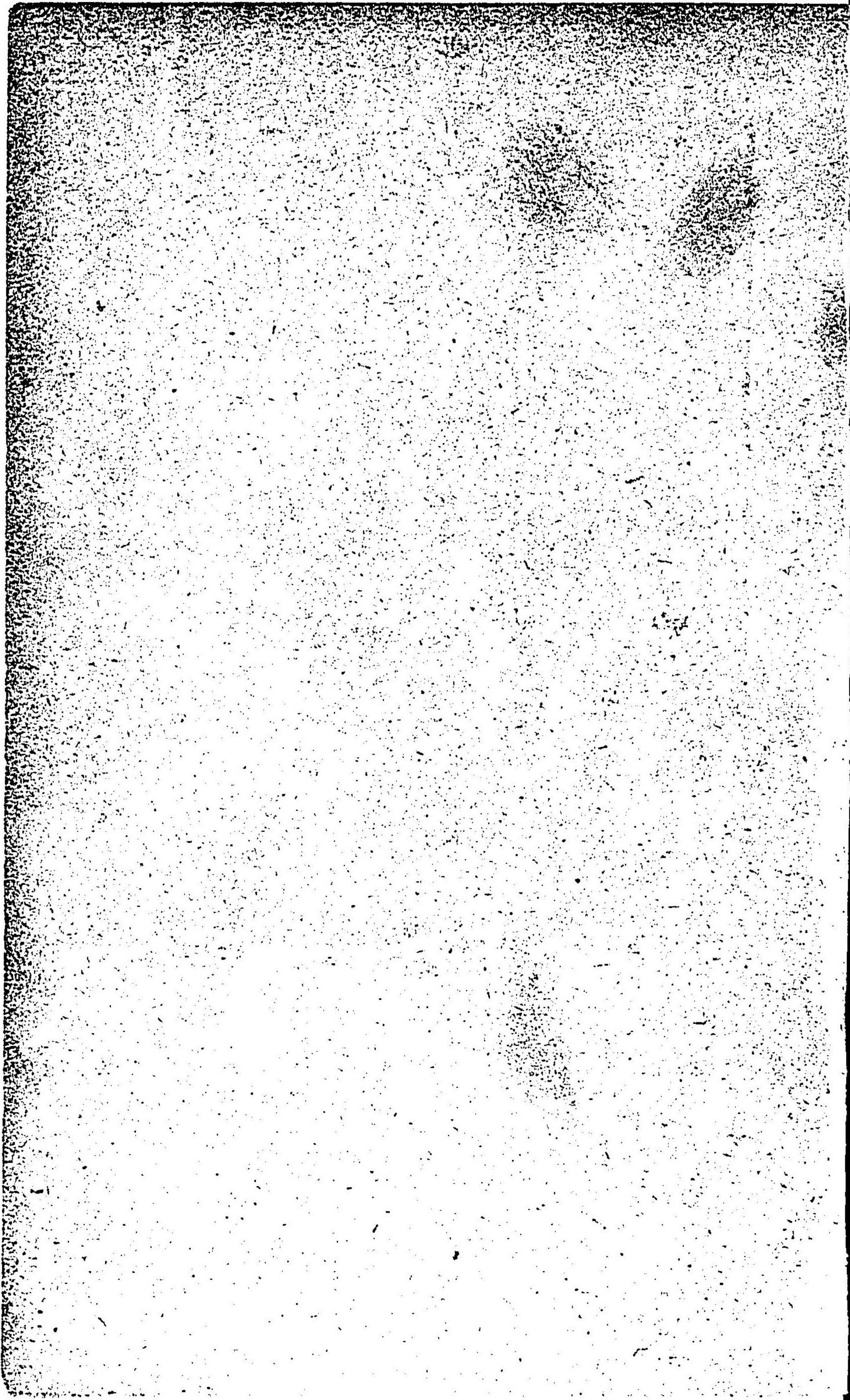
山梨縣勝沼仲町  
 出雲松江市  
 秋田市茶町  
 羽後湯澤大町  
 羽後酒田上登町  
 朝鮮仁川港  
 石川縣小松  
 同 金澤  
 大阪心齋橋筋淡路町北へ入  
 岡山市弓之町百三番邸  
 大分縣大分町  
 高知市  
 靜岡市吳服町  
 岡山市西大寺町  
 美濃大垣本町  
 越後新發田上町  
 長野縣上水内郡長野町丸上商店  
 松山市港町  
 鳥取市上魚町  
 大坂府豐能郡池田新町  
 信州松本  
 靜岡吳服町

正 榮 堂  
 川 岡 清 助  
 成 見 清 兵 衛  
 齋 藤 勘 右 衛 門  
 鈴 木 喜 八  
 山 岡 書 店  
 宇 都 宮 書 店  
 同 支 店  
 中 村 正 兵 衛  
 周 斐 營 平 堂  
 甲 斐 治 平 堂  
 開 成 舍  
 內 田 書 店  
 山 本 金 正 堂  
 渡 邊 商 會  
 萬 松 堂 支 店  
 齋 藤 祥 三 郎  
 向 井 藏 次 郎  
 山 本 吉 太 郎  
 鹽 川 豐 翠 館  
 太 鶴 林 堂

岩代福島町  
 上州前橋  
 越後懸田町  
 臺灣臺北  
 陸奥八ノ戸  
 近江長濱町  
 大津町字上京  
 山城日向町  
 上州原町  
 鳥取市智頭街道筋  
 若州小濱  
 伊賀國大野農人町  
 信濃洗馬  
 宮崎上野町  
 伊勢松阪町  
 但馬豐岡町  
 羽後増田町  
 陸奥弘前  
 信州上田原町  
 岡山市上元町  
 備中井原町  
 豐前行橋町

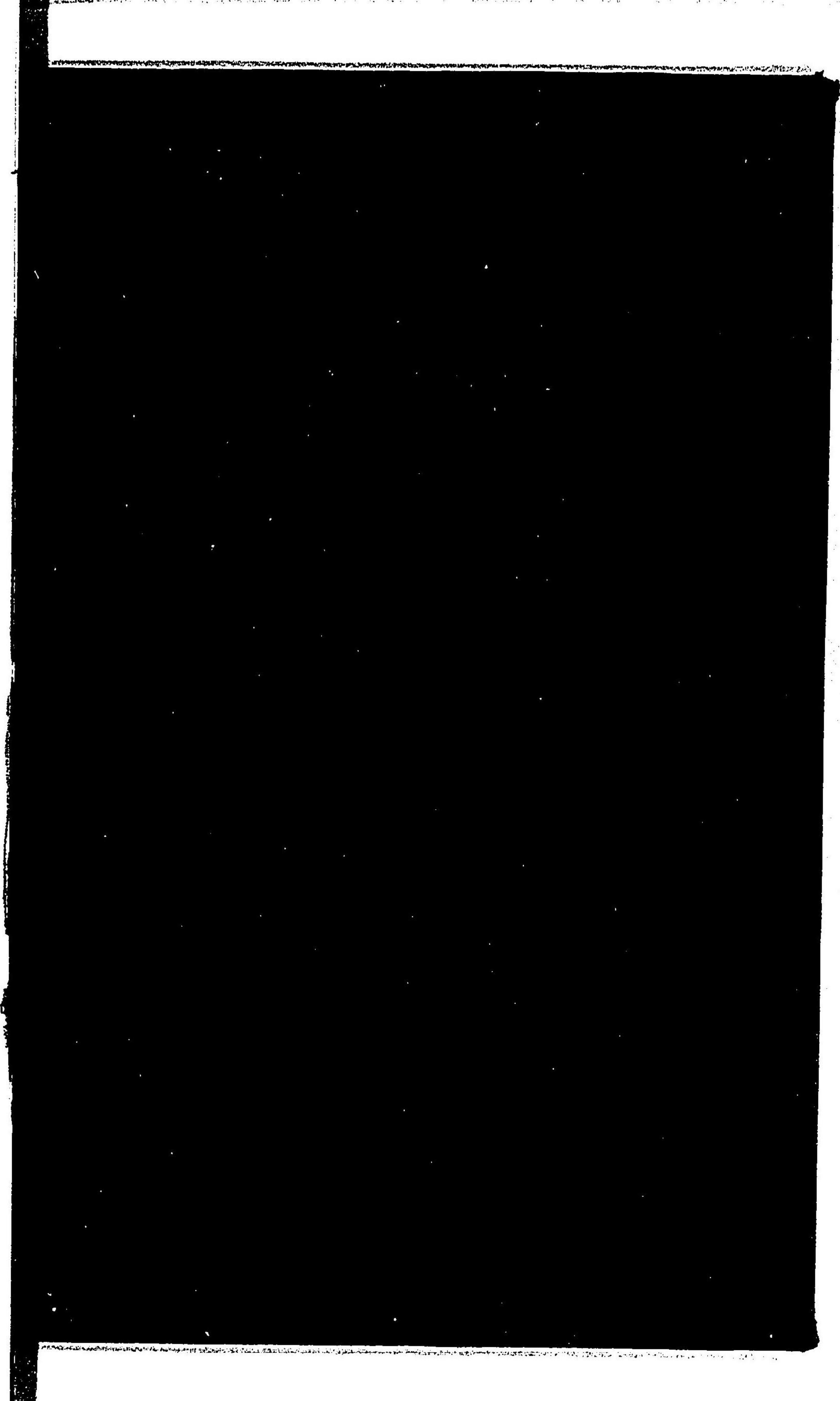
鈴 木 萬 助  
 耕 雲 堂  
 潤 身 堂  
 三 勝 堂  
 伊 吉 商 店  
 文 泉 堂  
 同 支 店  
 須 田 正 進 堂  
 山 口 商 店  
 旭 日 堂  
 吉 岡 昌 太 郎  
 安 屋 勝 次 郎  
 都 筑 文 明 堂  
 修 進 堂  
 清 玉 堂  
 由 利 安 堂  
 東 海 林 支 店  
 桂 澤 華 支 店  
 西 澤 支 店  
 本 郷 叢 文 堂  
 菽 田 叢 文 堂  
 高 橋 種 成 店

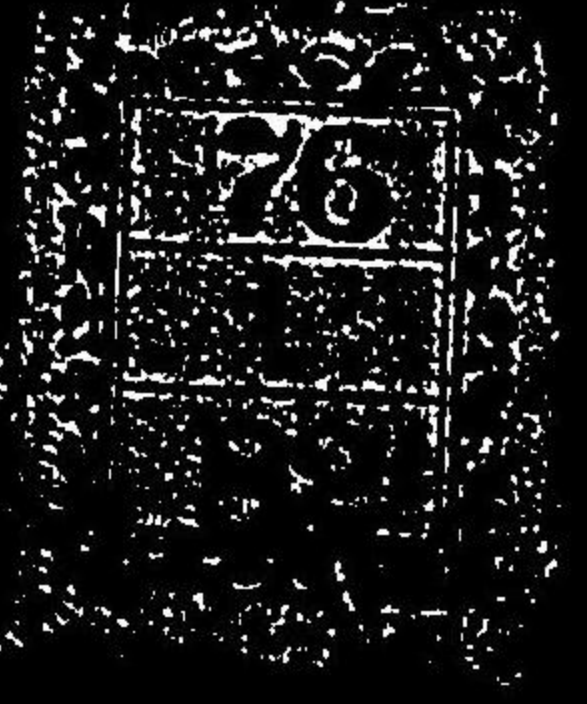




6

82





084947-000-0

76-82

日本文学梗概

民友社

M30

DBB-0335



